

タミルの聖徒列伝『ティルットンダル・プラーナム』 とナーヤナールの問題(序)

山下 博 司

1. はじめに

本論攷は『ティルットンダル・プラーナム (Tiruttonṭar-purāṇam)』¹⁾ 全体を俯瞰し、構造と内容を批判的に吟味することで、作品中に現れるナーヤナールと称される人々の歴史的事態と宗教史的位罫づけについて、考察すべき諸問題を析出することを目的としている。

『ティルットンダル・プラーナム』(「聖なる信徒の物語」)は中世タミル語²⁾によるシヴァ派の聖徒列伝で『ペリヤ・プラーナム (Periya-purāṇam)』^{ハギオグラフィ}の通称で知られる。作者はチョーラ朝クロットウंगाⅡ世(在位 1133-50)の廷臣だったセーッキラール (Cēkkilār) とされ、作品の年代も 12 世紀に同定されている。タミル・シヴァ派の聖典とされ、第 12 番目のティルムライ (tirumurai) に数えられる。本作品は絶対者の理論的側面(認識論、形而上学、救済理論等)には概して関心を示さない。焦点を形作っているのは、ナーヤナール、或いは集合的にナーヤンマール³⁾と称される 63 人 (aruṇattumūvar) のシヴァ信徒たちのひたむきなバクティである。神への信愛の証しとしての壮絶な行為の実践及びその讃美が主たるテーマを構成する。63 人には女性や低種姓の者を含む様々な出自の者が名を連ねる。数奇なバクタたちの所伝が、各々の名前を冠した「ナーヤナール・プラーナム」と呼ばれる小さなプラーナムをなし、2 巻 13 章に編成され、⁴⁾ 枠構造に収められて『ティルットンダル・プラーナム』を構成する。本作品は、^{ティルヴィライヤタル}神聖遊戯のもとシヴァ神が信者の誠信を試す奇譚を盛り、魅力ある宗教文学たるにとどまらず、地域・生業・出自・背景等の具体的記述にも富み、往事の文化・社会・宗教の様態を知るための貴重な材料をも提供している。

2. 『ティルットンダル・プラーナム』の構造と説話の類型的特点

本作品はタミル宗教文学の精華として秀でた知名度を有し、通俗本も広く出

(238) タミルの聖徒列伝『ティルットンダル・プラーナム』とナーヤナールの問題(序) (山 下)

回っている。しかし宗教史学的に客観的・批判的吟味が尽くされているとは言い難く、検討すべき問題を内包していると推定される。本作品の巻 (kāṇṭam) と章 (carukkam) の構成、及び各章のナーヤナールの数は次の表の通りである。代表的な説話パターン (プロット A, B) も下に掲げる。

第1巻 (Mutarkāṇṭam)	第2巻 (Iranṭān kāṇṭam)
I ー	VI 6名 (VI-1～6)
II 6名 (II-1～6)	VII 6名 (VII-1～6)
III 7名 (III-1～7)	VIII 7名 (VIII-1～7)
IV 6名 (IV-1～6)	IX 5名 (IX-1～5)
V 7名 (V-1～7)	X 5名 (X-1～5)
	XI ー
	XII 7名 (XII-1～7)
	XIII 1名 (XIII-1)

プロット [A] ⁵⁾

- ①シヴァ信者 (主人公) の背景 (出自, なりわい, 暮らし等) が述べられる。
- ②信仰心を試すためシヴァ神が (時に変装して), 信者に無理難題を持ち込む。
- ③信者がジレンマを克服し, シヴァ神への至誠を貫く (——しばしば常軌を逸した自己犠牲, 自傷行為, 他者の殺傷, 肉の奉納などの儀礼行為を伴う)。
- ④シヴァ神が姿を現し信仰の深さを讃嘆する。信者の復活, 治癒, 救済が為される。

プロット [B] ⁶⁾

- ①シヴァ信者 (主人公) の背景 (出自, なりわい, 暮らし等) が述べられる。
- ②信者がバクティに発する行為を貫徹しがたい状況に陥る。
- ③窮余の策を講じ, シヴァ神への至誠を貫く (——しばしば常軌を逸した自己犠牲, 自傷行為, 他者の殺傷, 肉の奉納などの儀礼行為を伴う)。
- ④シヴァ神により救済がもたらされる。

[A] は過激で劇的な説話類型, [B] は比較的穏健な類型である。[A] にはシヴァが信者のバクティを試す要素が付随し, [B] はその要素が明示的に現れないが, 熱烈なバクティに基づく果敢な行為の実行により神の恩寵を得るという大枠に従っており, 両類型に構造上の大差は見られない。ただし『ティルットンダル・

タミルの聖徒列伝『ティルットンダル・プラーナム』とナーヤナールの問題(序) (山下) (239)

プラーナム』中の逸話には、上掲の類型に該当しないものも多い。奇蹟の要素を欠く伝奇もあれば、淡々と奇特定のバクティの誠信が物語られるものもある。

上述のように本作品では神への奉仕が大いなる果報をもたらすものとして奨励されるが、その場合バクティが向かうべき対象は次の四様にわたっている。

- (1) シヴァ寺院への奉仕 (油, 灯明, 供物, 花, 寺の建立など)
- (2) シヴァ・リングへの奉仕 (供物, 花など)
- (3) シヴァ派^{シヴァ ヨーギン}の行者への奉仕 (食物の布施, 所望の充足など)
- (4) シヴァ神そのものへの奉仕 (持戒, 供物など)

各々の奉仕形態は相互に矛盾するものではなく、他を排除する形で成立しているわけではない。それぞれがシヴァ信仰の現れ方の一様相を示しており、説話の一つ一つがモザイクのように往古のシヴァ崇拝の全体像を織り成している。そこでは寺院崇拝的要素も一構成要素にすぎず、作品中で圧倒的な重みを帯びているわけではない。

タミル地方^{タミラガム}のシヴァ教には歴史的に二つの系譜が観察される。一つは寺院崇拝・聖像崇拝と結びつく流れであり、特定の寺、神の特定の顕現に対する祈りと儀礼が重視される。こうしたアーガマ的傾向は、バクティ先駆文献の『パリパーダル (Paripāṭal)』等に初出し、『デーヴァーラム (Tēvāram)』へ継承されタミル・シヴァ教の正統的な流派を作っていく。もう一つの系譜は、寺や像の介入を潔しとしない傾向をもち、聖者ティルムーラル (6世紀)、シヴァヴァーツキヤール (10世紀) 等を経て、ヴィーラ・シャイヴァ^{ヴァチヤナカーラ}の詩人たち (12世紀～) やスィットタル系の宗教者 (ターユマーナヴァル, ラーマリングル等) を輩出してきた。『ティルットンダル・プラーナム』に現れるバクティは、何れの系譜に偏向するものでもなく両様の傾向を併呑している。シヴァ信仰の多岐の様相を示す諸々のナーヤナール・プラーナムを一つに統合したのが『ティルットンダル・プラーナム』であると言える。

3. ナーヤナールと異教との抗争の問題

真正なバクティによりシヴァ神、修行者やその集団、及び既成のシヴァ寺院に無償で奉仕することの重要性を強調するのが本作品の趣意である。信者の獲得に尽くした者、異教の折伏に勲功ある者を頌えるのではなく、飽くまでもシヴァ教内での功德が讃美されるのである。

ナーヤナールが活躍した6～8世紀、特に前半期は、ヒンドゥー教とジャイナ

(240) タミルの聖徒列伝『ティルットンダル・プラーナム』とナーヤナールの問題(序) (山 下)

教・仏教との抗争が緊迫局面を迎えていた時代である⁸⁾。『デーヴァーラム』中のアッパル(6世紀後半～7世紀半ば)の詩には、カーンヂプラムでのジャイナ教との衝突が描出されている⁹⁾。同じくサンバンダル(7世紀前半～後半)の詩にも異教との激闘を彷彿させる内容のものもある¹⁰⁾。ところが『デーヴァーラム』の三詩聖(mūvar)の最後・スンドラル(7世紀末～8世紀前半または9世紀前半)¹¹⁾の詩では、異教との壮絶な対立の様子は影を潜めている。

McGlashanの研究によれば『ティルットンダル・プラーナム』で扱われる聖者中に、アッパルやサンバンダルと同時代か先立つ者が八人はいるという¹²⁾。しかるに、同作品中の彼らの伝奇では(仏教からの穏やかな改宗の事例を示すⅦ-1「サーッキヤ・ナーヤナール・プラーナム」を除き)、ジャイナ教や仏教との抗争がテーマを為していない。まして他のナーヤナールに関し異教との対立が扱われることは殆どない。タミル地方でヒンドゥー側がジャイナ教・仏教に対し優位性を確立するのが7世紀頃、それに代わってシヴァ派・ヴィシュヌ派の敵対関係が強まるのは10世紀のことである¹³⁾。スンドラルの詩が異教との緊張関係を彷彿させる内容に乏しいのは、対立が既に克服されつつあったからであろう。作者サーッキラール(12世紀)の頃になると、対峙すべき相手は仏教・ジャイナ教ではなく、ヒンドゥーの内部勢力、わけでもヴィシュヌ派になっていたと推測される。本作品に収載された諸伝奇中で(たとえ初期のバクタといえども)宗教対立的要素が希薄なのは、ヒンドゥーの優勢が定まって以降の宗教事情を反映するものと考えることができる。悪法をくじいた者よりシヴァ神へ誠実なバクティを捧げ尽くした者を讃えることが、当時の要請に叶っていたのである。ナーヤナールたちが6～8世紀に実在したとしても、人物像や事蹟の叙述が編纂時の時代要請に適合する形で変質と再編を被っている可能性を排除できない所以である。

4. 『ティルットンダル・プラーナム』の成立と担い手の問題

以上を踏まえ、『ティルットンダル・プラーナム』の位置づけを試みる。本作品で特徴的なのは『デーヴァーラム』の三詩聖、とりわけスンドラルに対する特段の扱いである。アッパルには4289首、サンバンダルには1256首という群を抜く分量の詩が捧げられ、スンドラルには作品の枠組みに関わる主人公的役割が負託されている。三人を権威化する流れの中で本作品が成立したと言ってよい。スンドラルへの特別扱いには理由がある。彼の『デーヴァーラム』(Cuntarar VII. 39)に11の詩から成る小品『ティルットンダッ・トハイ(Tiruttonṭattokai)』があり、『ティ

タミルの聖徒列伝『ティルットンダル・プラーナム』とナーヤナールの問題(序) (山下) (241)

ルットンダル・プラーナム』で詳説される(彼を除く)62人のナーヤナールが、簡略な解説とともに列挙されている。62人の順番も等しい。さらに『ティルットンダ・トハイ』のあと『ティルットンダル・プラーナム』成立の直前(10～11世紀初頭)に、ナンビ・ヤーンダール・ナンビが『ティルットンダル・ティルヴァンダーディ (*Tiruttonṭar-tiruvantāti*)』を著し、やはり63人のナーヤナールのリストを提示している。要は、タミル・シヴァ教の聖者伝承を63人として固定し、シヴァに身も心も捧げたバクタたちの伝奇を集成して正典化^{キヤノナイズ}する動きがその時代に顕在化していたことになる。セーッキラール(或いは編者たち)は伝承を纏め、自らも新たに資料や情報を集めるなどして聖徒列伝の編纂に取り組んだのであろう。何らかの伝承(群)に拠っていたことは、類話や内容重複の存在からも傍証される¹⁴⁾。伝承自体に混乱があるのか編集の不首尾なのか分明でないが、所伝を集め整理しようとしたことは暗に伝わってくる。「63」への固執については、10世紀のジャイナ教作品に63人の聖者が述べられており、それに倣った可能性が指摘されている¹⁵⁾。説話内容に重複が見られる点、架空の人物が混在している点、61番目と62番目の聖者がスندگانの父母である点などと併せ、セーッキラール以前のある時点で「63」にするための数合わせが行われたと考えることは不合理ではない。

セーッキラールは12世紀の人とされることから、10世紀頃に編纂された『デーヴァーラム』の存在を既に知っていたものと推定される。そのことは『ティルットンダル・プラーナム』中で与えられた三詩聖の卓越した地位からも首肯される。本作品は三詩聖の権威の一層の確立とナーヤナールの伝承の正典化という両様の役割を帯びて編まれたと見ることができる。タミル地方では、その一、二世紀後にタミル・シヴァ教(シャイヴァ・スィッターンタ)が体系化されるが、それに向けて着々と地均しが為されつつあったのである。

では『ティルットンダル・プラーナム』は、いかなる勢力がいかなる動機のもとに編んだのか。奇譚に隠れ見過ごされがちであるが、第XI章の“mupōtum tīrumēni tiṇṭuvōr purāṇam (24詩から成る短い節)”に、シヴァ・ブラーフマナを指す“mutarṇcaivarāmmunivar”と“civavētiyar”の語が現れ、日に3度シヴァへの礼拝を欠かさぬとして讃美する記述が存する。彼らは現タミルナードゥで、シヴァーチャーリヤル(civāccāriyar)、アーディ・サイヴァル(āticaivar)、グルツカル(kurukkal)等と呼ばれるシヴァ寺院付きの司祭集団である。第XI章が、聖者の叙述を盛る諸章の間に自然の脈絡を無視して配されていることから、特別の意図を以て挿入さ

(242) タミルの聖徒列伝『ティルットンダル・プラーナム』とナーヤナールの問題(序) (山 下)

れていることは明白である。作品中で最も枢要な位置を占めるスندگانがシヴァ・ブラーフマナを意味する“caiva antaṇar”に属する者とされていることも注目される(第I章158番)。さらに第IV章の「サンデースラル・ナーヤナール・プラーナム」(IV-6)には、四ヴェーダに長けたバラモン青年がアーガマにも通じ、リングを崇拝してシヴァ神に祝福される旨の箇所が見える。ヴェーダからアーガマへという宗教史上の転換を、一人のバラモンに託して象徴的に物語る記述である。作者セーッキラールはトンダイマンダラム出身のヴェーラーラル(農業カースト)とされるが、作品成立の背後にシヴァ寺院付きのバラモン勢力の存在が垣間見えるのである。タミルのヒンドゥー教にあって、バクティの宗教を民衆の信仰の現場で宣揚し、拡大・普及させるのに与って大いに力あったのは、実に寺院付きのバラモンであった。シャイヴァ系の寺院での儀礼の執行を職掌としていくアーディ・サイヴァルの存在が、本作品の中で明瞭に言及されていることは特筆に値する。

5. ナーヤナールとは誰か

ナーヤナールとはいかなる存在だったのか。彼らのうち三詩聖については、『ティルットンダル・プラーナム』に加え『デーヴァーラム』からも情報を得ることができる。それ以外の大多数のナーヤナールに関しては、『ティルットンダル・プラーナム』における記述が、最も権威ある、殆ど唯一の情報源になっている¹⁶⁾。それなのに誤解が跡を絶たない。『ティルットンダル・プラーナム』に登場する63人のうち、詩を残した者の数は極めて限られている。にも拘わらず、ナーヤナールたちを、寺々を回り歩いて神の詩を詠んだ“poet-saints”とする理解が未だに幅を利かせているのである¹⁷⁾。殆どが詩を残しているヴィシュヌ派のアルヴァール(計12人)との混同か何らかの対抗意識が働いているのでもあろうか。

ただし、先述したように、本作品の記述が史的存在としてのナーヤナールの実態を反映しているか否かは、また別個の問題である。伝承は編纂時のシヴァ教を取り巻く時代状況に即して改変され、信者獲保の要請や大義から脚色されていると考えるのが無難であろう。バクティの草創期の状況については、聖者たちの歴史性ヒストリシティの問題を含め批判的に文献を検証し、史料や考古学的知見と突き合わせて事実関係を丹念に確定していく作業が必須となる所以である。

1) *Cēkkiḷār Perumāṇ aruḷiya Periya Purāṇam eṇa vaḷaṅkum Tiruttonṭar Purāṇam*,

タミルの聖徒列伝『ティルットンダル・プラーナム』とナーヤナールの問題(序) (山下) (243)

Tiruvāvatuturai: Tirukkayilāya Paramparait Tiruvāvatuturai Ātīnam, 1988.

- 2) 時代的に先行するタミル語文学作品 *Cilappatikāram* に現れた viruttam という詩形が用いられている。Cf. Varadarajan, Mu. (tr. E. Sa. Visswanathan), *A History of Tamil Literature*, New Delhi: Sahitya Academy, 1988, p.151; Peterson, I. V., *Poems to Śiva: The Hymns of the Tamil Saints*, Princeton: Princeton University Press, 1989, pp.64-67.
- 3) “nāyanār” は, “nāyakan” (=leader) の音節省略から生じた “nāyan” の語に単数・敬称の接尾辞 “-ār” を付して作られた語である。“nāyan” に複数語尾 “-mār” を付せば “nāyanmār” を得る。
- 4) スンダラルの巡礼譚を作品の導入部に据え, 62 名のナーヤナール・プラーナム群等を挟んで, 終末部に再びスンダラルを登場させ, カイラーサ山への帰還を以て締めくくる。
- 5) アディバッタ・ナーヤナール・プラーナム (Ⅷ-3) 等が典型である (山下博司「低カーストとバクティ——古代・中世のタミル文献にあらわれた下層民」, 山崎元一・佐藤正哲編『歴史・思想・構造』叢書カースト制度と被差別民 1, 明石書店, 1994, 197 頁を参照)。
- 6) カナンブッラ・ナーヤナール・プラーナム (Ⅸ-1) が典型である (山下前掲論文, 195 ~ 196 頁を参照)。
- 7) 古代～中世のタミル地方は, 現タミルナードゥに加えケーララ地域とティルパティ地域を含む。
- 8) Peterson, *op. cit.*, pp.8-11.
- 9) *Tēvāram*: Appar IV. 312, V.186. (Cf. Peterson, *op. cit.*, pp.292-296.)
- 10) *Tēvāram*: Campantar II.202, III.297, 305, 309, 345, 366, 378. (Cf. Peterson, *op. cit.*, pp.272-281.). ジャイナ教や仏教との対立と折伏の逸話は『ティルットンダル・プラーナム』のこれら聖者に関する二つのナーヤナール・プラーナム (V-1: 1310-1399, VI-1: 2529-2777, 2800-2824) でも扱われている。(サンバンダルがジャイナ教徒だったパーンディヤ王を治病しシヴァ教に改宗させた話は, VI-1 のほか IX-3 と XII-2 にも言及される。)
- 11) 三詩聖の年代については, McGlashan, A., *The History of the Holy Servants of the Lord*, Victoria: Trafford Publishing (on-demand publication), 2006, pp.398-402 を参照。
- 12) McGlashan, *loc. cit.*
- 13) Dehejia, V., *Slaves of the Lord: The Path of the Tamil Saints*, New Delhi: Munshiram Manoharlal, 1988, p.32.
- 14) 例えばⅢ-1 とⅧ-2 の類似, X-1 と X-3 の類似, VI-1, IX-3, XII-2 の重複などがある。
- 15) Dehejia, *op. cit.*, p.19.
- 16) Peterson, *op. cit.*, p.19.
- 17) 例えば, Varadarajan, Mu., *op. cit.*, p.151; Peterson, *op. cit.*, p.44 などが例である。

〈キーワード〉 南インド, タミルナードゥ, ヒンドゥー教, バクティ, シヴァ派
(東北大学教授, Ph.D.)